



自然栽培パーティ その9

編集部=文
text by KOTONONE
岸本 剛=写真(P66~71)
photograph by Tsuyoshi Kishimoto
加藤友美子=写真(P72~73)
photograph by Yumiko Kato

自然栽培パーティの田んぼに、 カシオもトヨタもやってきた

群馬・前橋市ではカシオ計算機の社員とその家族が田植えのボランティアにやってきた。
愛知・豊田市ではトヨタ自動車の人たちが、雑草取りに励む。
日本を代表するグローバル企業が、なぜ支援するのか。
田んぼから、いまの社会や企業の課題、そして障害者福祉の役割が見えてくる。

ようこそ、カシオのみなさん

晴れてよかった。榛名山もはつきり見える。梅雨またた中の六月中旬、群馬県前橋市の社会福祉法人ゆずりは会「菜の花」で、自然栽培パーティの田植えがはじまった。田んぼには、カシオのロゴマーク入りのぼりがはためく。あぜ道には、自然栽培パーティのユニフォームTシャツ姿で、六〇人以上が並んだ。Tシャツの肩にはCASIOのロゴマーク。東京から駆けつけた、カシオ計算機株式会社から駆けつけた、カシオ計算機株式会社の社員ボランティアの人たちだった。

今日の田植えは、いわば、カシオと自然栽培パーティの共同田植え式。カシオの執行役員・小林誠さん(CSR推進部長)の仕切りで、「ゆずりは会」の理事長・関根嘉明さんが歓迎のあいさつをした。「田んぼの水は、榛名山の沢

から十数キロかけて流れてきました。六〇年前には川には、ドジョウもサワガニもウナギも鯉もいました。川は日本を映す鏡です。高度成長で農業が盛んに使われて、すっかり姿を消しました。低毒性の農薬に切り替えられて、いままた、ドジョウ、サワガニが戻ってきました。これからは、自然栽培を広げて、昔のような自然に戻したいと思っています」。締めのことばにかかったとき、突然、後ろで大きな声が上がった。男の子が、田んぼに飛び込んでいた。すでに、からだは泥だらけ。すべる。寝転ぶ。ひっくり返る。からだは、やっと、目の見分けがつくほど。結局、男の子は、みんなが田植えを終えるまで、二時間ほど泥に浸かりっぱなしだった。

榛名山を望む「菜の花」の田んぼで田植えがはじまる。
総勢60人を超える

